『埼玉大学紀要（教養学部）』第 56 巻第 2 号、2021 年

時間知覚と時間の流れ

Temporal Perception and the Flow of Time

星野　徹 *
Toru HOSHINO

本論文では時間知覚と時間の形而上学の関係について考察する。1 では、私たちが知覚するのは出来事の継起と時間の長さだけであり、それに加えて時間の流れを知覚しているわけではないという説が批判的に検討される。2 では、時間の流れの知覚が錯覚であるという説を検討する。人や物は時間部分からなる 4 次元的存在であるとすれば、時間の流れの錯覚をうまく説明できると主張する 4 次元主義は、人間の意識のあり方について常識とかけ離れた見方に陥ることになるということが示される。3 では、時制的性質の実在を否定する B 理論と 3 次元主義の組み合わせについて検討する。3 次元的世界では、時制的性質が実在しなくとも、時間の流れの知覚が錯覚と見なされる必要はないということが示される。
キーワード：時間の流れの知覚、時間部分、B 理論

1　長さの感覚と流れの感覚

今年ももうすぐ終わり、やがて新しい年を迎えことになる。いやな出来事もいつかは過ぎ去る。夜もいつかは明けるのだ。いや、いつかではない。新年は 5 日ほどでやって来るし、今日の夜はあと 6 時間もすれば明ける。時間は刻々と流れているからである。ほとんどの人々は、そのように信じているだろう。そして、来たるべき年がより良いものとなることを念じて働き、過ぎ去った幸福な日々を懐かしむ。

しかし、哲学者の多くは時間が流れているという常識を否定する。時間が流れるとはどのようなことかと問われれば、多くの人は、未来の出来事が現在となり、やがて過去へと遠ざかって行くことであると答えるだろう。あるいは、現在という時点が出来事の上を移動することであると答える人もいるかもしれない。ところが、B 論者と呼ばれる哲学者は過去・現在・未来など実在しないと主張する。宇宙には現在という特権的な時間はないのであり、したがって、時間の流れといったものもないのである。すると、すでに立冬は過ぎ去り、もうすぐ正月がやってきて、正月が過ぎると次には立春がやってくるという私たちの信念は誤った信念であることになるだろう。しかし、それでは、時間が流れるという私たちの信念はどのようにして生み出されたのだろうか。

私たちは時間が流れたと判断するだけではなく、時間が流れていることを知覚してもいるように思われる。たとえば、秒針の動きを見ている人は時間が流れていることを知覚しているのではないだろうか。時間の流れの知覚が錯覚だとすれば、私たちは何をどのように見誤っているのだろうか。

* ほしの・とおる、埼玉大学人文社会科学研究科教授、哲学

ミュラー・リヤーの錯視では、同じ長さの線分が矢羽根の方向によって異なった長さに見える。時間知覚においては何が同じ長さの二つの線分に相当するのだろうか。

一方で、B 論者の中には、私たちには時間が流れているように見えているわけではないと主張する人たちがいる。時間の流れというものが実在しないだけでなく、時間の流れの現象学も実在しないというのである。たとえば、デング(2019)によれば、私たちが知覚するのは時間の継起と時間順序、そして、持続の長さだけであり、それに加えて時間の流れが知覚されているわけではないのである。まず始めに、時間知覚が錯覚なのではなく、時間知覚が流れの知覚を含むという考えが錯誤なのだというデングの説について検討しておこう。

時計の秒針の動きの知覚とは、確かに、1 時の位置、次に 2 時の位置、次に 3 時の位置というように、秒針の位置が移り変わって行くことの知覚であるように思われる。位置の変化量によって私たちは時間の経過を知るのである。秒針の動きに限らず、一般に、変化の知覚は状態の継起の知覚である。列車の動きを知覚するとは、列車の位置が刻々と変わって行くことの知覚であり、メロディーの知覚とは、音が次々と移り変わって行くことの知覚である。私たちの注意が知覚印象に向けられている限り、私たちに現れるのは秒針や列車の位置の継起であり、音の継起である。

しかし、継起の知覚が時間の流れの知覚でもある場合があるように思われる。試験終了間近の受験生は秒針の進み具合が気になって仕方がないだろう。そして、試験が終わるまでになるべく多くのマークシートを塗りつぶそうとするだろう。秒針が 12 時の位置に来ると試験が終了するとすれば、秒針が 12 時の位置に向かって動いて行くことの知覚は試験の終了時刻が近づきつつあることの知覚でもある。そして、秒針が 12 時の位置に到達するのを知覚することは、試験終了の時刻がやって来たことを知覚すること、すなわち、試験終了の時間が現在となったことの知覚である。同じように、列車がホームに近づきつつあることの知覚は、列車がホームに到着する時間が近づきつつあることの知覚でもある。列車を待つ人は、列車がホームに近づきつつあることを知覚することによって、列車の到着時刻が近づきつつあることを知覚するのである。また、列車がホームから遠ざかって行くのを見送るとは、列車がホームを離れた瞬間が過去へと遠ざかって行くのを知覚することでもある。聴覚の場合も同じである。チャイムが鳴り終えた瞬間に試験が終了するとすれば、チャイムが鳴り続けることの知覚は、試験終了の時間が近づきつつあることの知覚でもある。

変化の知覚が時間の流れの知覚となるのは、継起する出来事のうちの特定の一つに着目する場合である。秒針が 12 時の位置に到達する瞬間に注目すれば、秒針が 12 時の位置に向かう運動の知覚は、秒針が 12 の位置に到達する時点が未来から現在へ向けて近づきつつあることの知覚でもあることになる。また、列車の動きの知覚が時間の流れの知覚となるのは、たとえば、列車がホームに到着する時点に注意を固定するときである。そのとき、列車の動きの知覚は、あるいは、列車がホームに到着する時間が近づきつつあることの知覚となり、あるいは、列車がホームから離れた時間が過去へと遠ざかりつつあることの知覚となるのである。

秒針や列車の運動の場合には、列車や秒針といった運動体が知覚されている。運動体が 12 時の位置や駅のホームのような目印となる地点に向かって近づきつつある様子が知覚されているのである。しかし、チャイムが鳴り終えるのを待ち構えている受験生は、チャイムの最後の音を知覚している

わけではもちろんない。受験生はチャイムの最後の音に意識を集中しながら、それが徐々にどこかに近づいてくるさまを知覚しているわけではない。最後の音はまだ聞こえていないし、最後の音が近づいてくる「どこか」など存在しないからである。それでは、受験生がチャイムの最後の音が近づきつつあると感じるとは一体どのようなことなのだろうか。

聴覚体験と視覚体験の類比が成り立つ場面がないわけではない。パトカーのサイレンの音を聞いている人がいるとしよう。サイレンの音はどんどん大きくなり、頂点に達すると小さくなりはじめ、やがて消えて行く。サイレンの音が聞こえてくると、その人は、音がこれからだんだん大きくなり、そのうち最大音になると予測するだろう。そして、最大音になる瞬間が近づきつつあると思うだろう。音が最大になる瞬間が近づきつつあると思うとき、彼は最大音に注意を向け、それが近づいてくる様子を観察しているわけではない。音が徐々に大きくなる様子を観察しているだけである。この場合、音の増大は列車の姿がホームに近づくにつれて徐々に大きく見えてくるという現象に対応するだろう。同一の音源から発せられた音が、音源が自分のいる場所に近づくにつれてだんだん大きく聞こえてくるのである。音の大きさの変化は音源と知覚主体の距離の変化を表象しているのである。

しかし、同じ聴覚体験でも、チャイムのケースはこれとは異なる。次のようなケースを考えてみよう。ベートーヴェンの「第 9」の演奏を聴いている人がいるとしよう。何度も「第 9」を聴いてきた人ならば、第 4 楽章も半ば近くになると、もうすぐ全合唱が歓喜のテーマを歌い始めると思うだろう。そして、演奏が進むにつれて、歌い始めの瞬間が近づいていると感じることだろう。合唱団の団員ならばなおさらである。彼女は自分の出番が近づきつつあることを感じ「腕の見せ所だ」と身構えることだろう。しかし、「第 9」を聴いている人はなぜ聞こえてもいない音が近づいていると感じるのだろうか。また、合唱団の団員は何を手がかりに歌い出す瞬間が迫っていると感じるのだろうか。

私たちが時間の流れに気づくには二種類のやり方があるように思われる。一つ目は次のような場合である。私たちは時間の長さの概念を持っている。時間の長さは数値化が可能であると考えられており、長さ同士を比較して「今日の試合時間は昨日の試合時間の 2 倍だった」などと言ったりする。「プライマリー・バランスを黒字化すべき 2025 年度が近づいてきた」と財務官僚が焦ることができるのは、2018 年の時点ではまだ 7 年先のことだったのに 2020 年においてはもう 5 年しか猶予がなくなっているからである。7 年の長さと 5 年の長さを比較し、「あれからもう 2 年の時が流れてしまった」といって嘆くのである。私たちは、過去の特定の時点に視点を持って行き、その時点から目標となる時点までの時間的距離を測定した後に、それを現在の時点から目標となる時点までの時間的距離と比較することがある。そうしたときに私たちは時が流れたと感じるのである。

また、私たちは時間の長さの概念だけではなく時間の長さの感覚も持っている。私たちは時間の長さを知覚することができる。そして「今日の試合は昨日の試合より長く感じられた」とファン同士が語り合うことができる。また、一流ランナーが 100m を駆け抜けるのに要する 10 秒間とはどれ位の長さなのか、1 分間黙祷せよと言われたらどれ位の間目を閉じていれば良いのか、おおよその見当が付く。そして、時計を見ずに 10 秒間走ってみようと試みたり、1 分間目を閉じていようと試

みたりすることができる。

さらに、時間の長さの感覚に加えて、私たちは時間が経過しつつあるという感覚も持つことができる。1 分間の黙祷をしている人は、目を閉じた時点が徐々に遠ざかり、黙祷終了の時間が近づきつつあると感じることができる。そして、黙祷開始から 1 分経過したと感じられる頃に目を開くのである。

私たちはこのような時間の経過の感覚能力によって時間の流れを知覚している場合もあるように思われる。「第 9」の場合がそれに当たるだろう。「第 9」を聴き慣れた人や歌い慣れた人が、歓喜の歌の瞬間が近づいてきていると感じることができるのは、私たちが、時間が経過しつつあると感じることができるからである。2025 年度が近づいてきたという感覚は、視点を現在から過去へ移動させることによって生じたものであるが、「第 9」の場合はそうではない。視点の移動といった心的な操作なしに直接未来の出来事の接近を感じているのである。「第 9」を聴き慣れている人は、演奏が第 4 楽章に入り、しばらくすると、この後どれ位の時間で歓喜の歌が歌い出されるか予想が付く。そして、時間の経過の感覚と共に、歓喜の歌が近づいてくるのを感じるのであり、歓喜の歌が響き始めると「待ってました」と心の中で叫ぶのである。2025 年が近づいてきたという思いの場合とは違って、「第 9」の聴衆は時間の流れそのものを実感しているのである。

それでは、時間の長さの感覚と、時間が経過しつつあるという感覚はどのような関係にあるのだろうか。デングが主張するように、時間の流れの感覚は、時間の長さの感覚と継起の感覚に還元されるのだろうか。

時間が経過しつつあるとは、時間の長さが増大しつつあることであるのだから、時間の流れの感覚は時間の長さの感覚に依存しているというように思われるかもしれない。しかし、事はそれほど単純ではない。たとえば、10 秒間とはどれ位の長さなのか実感してみたい人は、目を閉じて時間が経過するのを待つだろう。そして、10 秒経過したと感じられた頃に目を開いて時計の秒針の進み具合を確認するだろう。秒針が 60° 移動していれば、そのとき感じられた長さの感覚が 10 秒間の感覚なのである。目を閉じてから 3 秒経ち、5 秒経ち、7 秒経ち、というように、目を閉じた瞬間が徐々に遠ざかって行くという感覚を持つからこそ、私たちは 10 秒経過したという感覚を持つことができるのであり、10 秒間の長さの感覚を獲得することができるのである。私たちに、時間が経過したという感覚、すなわち時間の流れの感覚がなければ、私たちは時間の長さの感覚を持つことはできなかっただろう。では、こうした時間の流れの感覚が錯覚であるとはどのようなことなのだろうか。

2　時間の流れと時間部分

上の問いに対しては標準的な答えがある。時間の流れの錯覚は、自己は 3 次元的存在であるという誤った考えに由来するというものである [1]。3 次元主義は人や物の持続を、人や物全体が時空領域を進んで行くこととしてとらえていると言われる。トランプが存在するとは、3 次元主義者によれ

[1] Williams(1951), Velleman(2006), Ismael(2011), 星野(2018)を参照されたい。

ば、トランプ全体が 2016 年、2017 年、2018 年、2019 年、2020 年、2021 年と進んで行くことなのである。トランプを固定すれば、トランプに 2021 年が徐々に近づき、やがてトランプから遠ざかって行くということになる。一方、4 次元主義と呼ばれる立場によれば、人や物は時空領域に延び広がって存在している。2016 年に存在するのはトランプ全体ではなくトランプの時間部分であり、2021 年時点に存在し、テレビカメラに映し出されているのもトランプ全体ではなく、トランプの時間部分に過ぎないということになるのである[2]。

3 次元主義が、時間が流れているという日常的な世界観と相性が良いということは見やすいことである。3 次元主義によれば私は時間の中を未来へ向けて歩んで行くからである。私が歩みを進めるにつれて、未来は現在となり、やがて過去へと去って行くのである。しかし、それでは、4 次元主義を受入れた場合、時間の流れの錯覚はどのように解消されるのだろうか。

2025 年が近づいてきたと焦っている人 A を考えてみよう。「2 年前にはまだ 7 年先のことだと思っていたのに、もう 2 年が過ぎてあと 5 年になってしまった」と焦るとき、A は 2018 年時点における自分と 2020 年時点における自分を比べてみて、「2025 年が 2 年も近づいてきた」と考えていることになる。A は自分が時間の中を 2 年間歩み続けてきたと考えているのである。しかし、4 次元主義が正しければ彼の判断は誤解に基づくものである。2018 年に「まだ 7 年ある」と考え、2020 年に「あと 5 年になってしまった」と考えているのは A の異なった時間部分であるからである。2018 年における A の時間部分と 2020 年における A の時間部分を隔てる時間的距離はずっと変わらぬままである。「まだ 7 年ある」と考えている時間部分が時間の中を移動してきて「あと 5 年になってしまった」と考えているというわけではないのである。

ここで一つ注意しておきたいことがある。それは、4 次元主義に時間の流れを付け加えても事態は何も変わらないということである。4 次元的世界では、時間が流れているとしても、未来の出来事が近づきつつあるという思いは錯覚なのである。

トランプの時間部分が時間軸の上に延び拡がっているとしよう。1946 年から、おそらく 2020 年代かさらにその先までトランプのブロックは延びているのだろう。こうして延び拡がっているブロックを、現在というスポットライトが順番に照らし出して行くと考えれば 4 次元主義的動くスポットライト説が描く世界となる。

現在は 2021 年 1 月 3 日である。2020 年 11 月の大統領選挙で敗北したトランプは、気を取り直して 2024 年の大統領選挙に出馬しようと考えているところである。「前回の大統領選からもう 2 ヶ月も経ったのだから、2024 年 11 月などあっという間にやって来る」とトランプが自らを慰めているとすれば、トランプの思考は事実に合致しているだろうか。今現在のトランプから 2020 年の大統領選挙は遠ざかり、2024 年の大統領選挙は現在のトランプに近づいてきているのだろうか。

たとえ時間の流れが存在しているとしても、こうしたトランプの判断は、4 次元的世界においては誤りである。2021 年 1 月のトランプの時間部分に対して、2020 年 11 月の大統領選挙が遠ざかりつつあるわけではないし、2024 年 11 月の大統領選挙が 2021 年 1 月のトランプの時間部分に近づきつつあるわけでもない。2021 年 1 月のトランプの時間部分が 2020 年を後にして 2024 年に向けて歩

[2] 3 次元的対象と 4 次元的対象の違いについては Sider(2001, chap. 1)による。

みを進めているわけでもない。世界中で生起するいかなる出来事も、時間の流れによって、2021 年 1 月のトランプの時間部分との時間的距離を縮めたり拡大したりすることはないのである。

4 次元的世界において時間が流れているとすれば、1946 年から拡がるトランプのブロックの上を今という特別な時点が秒速 1 秒の速度で進んで行くのだろう。あるいは、今のラインを、1946 年部分を先頭とするトランプ・ブロックが秒速 1 秒で通過して行くのだろう。2020 年 11 月のブロック部分は今のラインから遠ざかり、2024 年 11 月のブロック部分は今のラインに近づきつつあるのだろう。では、2020 年 11 月の大統領選挙はトランプから遠ざかり、2024 年 11 月の大統領選挙はトランプに近づいているということになるのだろうか。決してそのようなことはない。二つの大統領選挙はトランプ・ブロックと共に秒速 1 秒で動いているからである。

このように、時間が流れているとしても、したがって、あらゆるものが未来から現在、そして過去へと移動しているとしても、その世界が 4 次元的である限り、その世界の住人に対して、出来事が近づいてきて、通過し、やがて遠ざかって行くなどということは生じてはいないのである。次の大統領選挙が近づいているというトランプの判断は、やはり自分が 3 次元的存在であるという誤解に基づくものなのである。

それでは、試験の終了が近づいている、歓喜の歌が近づいている、といったように、時間の流れを直接知覚しているように思われる場合はどうだろうか。こうした体験において、私たちは、過去を振り返るなどという心的な操作を経ることなく、未来の出来事が近づいてくることを生々しく実感しているのではないだろうか。

歓喜の歌開始 5 分前の時点を t5、4 分前を t4、3 分前を t3 …としよう。さらに、「第 9」好きの人間の時間感覚が正確だとしよう。演奏を聴きながら、歓喜の歌が始まるのを今か今かと待ち構えている人は、t5 の時点になると、「このテンポならば歓喜の歌はあと 5 分もすれば始まる」と思うだろう。t4 においては 4 分後に、t3 においては 3 分後に、t1 においては 1 分後に始まるとそれぞれ思うことだろう。そして、「もうすぐ始まる」となり、ついに t0 において「待ってました」となるのである。この時間帯のどの時点においても彼は歓喜の歌が近づいていると感じているはずである。どの時点においても彼は時間の経過を感じているからである。あるいは、少なくとも時間の流れを直接感じているように彼には感じられているはずである。歓喜の歌の出現を待ち構えるより他のことを彼は意識的には行ってはいないからである。

合唱団の団員も同じである。曲の進行と共に、歌い出しの瞬間が刻々と近づいていることを感じ取り、今だと思った瞬間に、指揮者の合図に合わせて彼女は歌い出すのである。時間の流れを知覚する能力を持たなければ、人は合唱や合奏などできないことになってしまうだろう。しかし、ある種の行為を適切に遂行するために必要不可欠とされるこうした時間の流れの知覚が、実はすべて錯覚であるなどということがはたしてありうるのだろうか。

時間の経過を直接知覚していると思われるこうしたケースにおいても、2024 年の大統領選挙が近づいてきたと判断するトランプと同じような説明が考えられるかもしれない。それは、たとえば、次のようなものになるだろう。等しい長さの音刺激 a, b, c, d がこの順番で、間をおかずに私に与えられたとしよう。私は a を知覚し、その次に b を知覚し、その次には c を知覚し、というように私

の知覚内容は次々に移り変わって行く。それに加えて、a から d までの間隔が短ければ、私は a, b, c, d がこの順番で聞こえているということも知覚するだろう。さらに、私はこれらの音が遠ざかりつつあるということも知覚しているだろう。音が遠ざかりつつあることを知覚するとは、たとえば、c の音が聞こえているとき、私は b が聞こえていたときよりも a との間隔が拡がっていると感じているということであるだろう。私は a, b 間の距離と a, c 間の距離を無意識のうちに比較することによって、a が遠ざかりつつあると感じるというわけである。しかし、a, b, c が聞こえていたときの知覚主体が私の異なる時間部分である場合には、こうした流れの知覚は錯覚であることになるだろう。a が聞こえていたときの時間部分に対して、c が聞こえていたときの時間部分が、b が聞こえていたときの時間部分よりも遠い位置にあるということは言えても、a が遠ざかりつつあるとは言えないはずである。a が聞こえていたときの時間部分と c が聞こえているときの時間部分の距離は変わらぬままであるからである。音が遠ざかりつつあるという感覚は、同一の私が時間の中を様々な刺激を受取りながら歩んで行くという誤った 3 次元主義的世界像を無意識のうちに受入れた結果なのである。

こうした説明は成功しているだろうか。未来の出来事が近づきつつあり、また、過去の出来事が遠ざかりつつあるという、いわば、現在進行形の流れの知覚の場合、時間部分を持ち出すことによって時間の流れの知覚が錯覚であることを示そうとしても、トランプの場合ほどうまくは行かないように思われる。先に述べたように、時間部分による説明が正しければ、時間の流れの知覚だけでなく、時間の長さの知覚も錯覚であるということになってしまうからである。

時間の長さを知覚するには時間がかかる。色の知覚や形の知覚、味の知覚やにおいの知覚はほぼ瞬時に行うことができるが、時間の長さの場合はそうは行かない。10 秒の長さを知覚するにはちょうど 10 秒かかるし、5 分の長さを知覚するにはちょうど 5 分かかる。これは、赤さを知覚するには赤い物体を見なければならず、甘さを知覚するには甘い物を舐めてみなければならないということと同じである。白い物を見ても赤さを知覚したことにはならないように、5 秒間の持続を体験しただけでは 10 秒間の知覚にはならない。10 秒を知覚するには 10 秒待たなければならないのである。それは、たとえば、号砲を合図として、号砲が鳴り響いた瞬間から 10 秒経過するのを待つことであり、号砲が鳴り響いた瞬間が 1 秒、2 秒、3 秒と徐々に遠さかって行くことを観察することである。そして、10 秒経過した時点で初めて 10 秒の長さを知覚したことになるのである。こうして、時間の流れの知覚が錯覚ならば、時間の流れの知覚と不可分に結びついている時間の長さの知覚も錯覚とならざるを得ないのである。

ところで、プライスは、時間の形而上学と時間の現象学を調停するためには、時間の流れを二次性質と見なす必要があると主張している(Price, 2011, pp. 305-306)。ロックが物の持つ性質を形や延長、固性などの一次性質と、色や音や味やにおいなどの二次性質に分類したことはよく知られている。一次性質は物がどのような状況でも必ず持っている、物そのものに備わる性質であるのに対して、二次性質は物の持つ感覚を引き起こす力であるとされる。たとえば、赤い物体は、視覚を備えた生物に赤の感覚を引き起こす力を持つのである。二次性質は、ロックにおいては一次性質と同じように物の性質と見なされているが、後にロック説は拡大解釈されて、二次性質は物の性質ではな

く知覚者の心的な性質であると見なされるようになって行く。赤さとはポストの性質ではなく、ポストを見ている人の心において実現する心的な性質であるというわけである。

プライスが時間の流れは二次性質であると言うとき、プライスが意味しているのは後者、すなわち拡大解釈された意味における二次性質である。時間の流れは外界に実在するわけではなく、心的な現象であるにすぎないということである。そして、時間の流れが単なる二次性質ではなく外界に実在すると信じられてきた背景には、自己は 3 次元的存在であるという抜きがたい思いがあるとやはりプライスも指摘する。

プライス自身は、心的な現象としての時間の流れと実在の世界がどのような関係にあるのかということも、また、自己が 3 次元的存在であるという思いがいかにして時間の流れの信念を生み出すのかということも明らかにしてはいない。しかし、時間の流れを二次性質とみなすことは全くのナンセンスであるというわけでもないように思われる。

色や音やにおいのような二次性質が外界に実在しない心的なものだとしても、これらの性質が生きて行く上で何の役にも立たないというわけではない。鼻がきく動物はにおいによって敵と獲物を識別することができるし、耳のいい動物はかすかな音で捕食者が近づいていることを感知し、逃げることができる。また、人間は二次性質を利用して行為を制御する。たとえば、信号が赤く見えたら止まる、という規則を設けることによって自動車や歩行者の動きを円滑にしている。私たち人間も、そして、おそらく犬や猫や象のような動物も、二次性質を手がかりとして外界を動き回り、生きている。二次性質が心的なものであるとしても、同時にそれは外界についての情報も担っているのである。同様に、時間の流れが二次性質であり、それゆえ、外界に実在するものではないとしても、時間の流れの錯覚が私たちの行動に有用であるということはありうることである。

しかし、時間の流れの知覚と色や音やにおいなど通常の二次性質の知覚の類比が完全にうまく行くというわけでもない。二次性質が、たとえそれが心的であったとしても、私たちに外界のことを知らせてくれるのは、知覚が因果的だからである。赤い物が見えているということは、ロックが言うように、目の前に赤の知覚体験を引き起こす力を持った物があるということなのである。同じように、苦く感じられれば、苦さの知覚体験を引き起こす力を持った物体を口の中に含んでいるということであるし、獣のにおいが感じられれば、近くに獣のにおいを引き起こすものがいるということである。こうして、私たちは因果的知識を介することによって二次性質の知覚から外界についての情報を引き出しているのである。しかし、時間の流れの知覚について、その原因を時間の性質のうちに見いだすことはできないように思われる。時間そのものが因果的力を持っていて、その力が時間の流れの知覚を引き起こすといったことはありえないことのように思われる。60 秒間の時間の長さが、時計の秒針を一周させたり、振り子時計の振り子を 60 往復させたりする因果的力を持っているわけではない。また、100m を 10 秒で走る能力を持ったランナーが、100m を 10 秒で走り抜けたとき、10 秒という時間の長さが因果的力を発揮してランナーに 100m を走らせたわけでもない。時間が物や身体ではなく心や脳に因果的に作用して時間の流れの知覚を引き起こすということも同じように考えられないことである [3]。

[3] 時間知覚の非因果性については、Le Poidevin (2007, II -6)、星野（2019）を参照されたい。

時間の流れの知覚が因果的ではないとすれば、なぜ私たちは、たとえそれが錯覚だとしても、時間の流れの知覚に促されて行動するのだろうか。そして、そうした行動がなぜ周りの人たちの行動と多くの場合合致し、世界の変化とうまく適合するのだろうか。

最もシンプルな答えは、時間の長さや時間の流れの知覚において、私たちは直接時間の長さや時間の流れを知覚している、というものである。時間知覚は時間によって引き起こされているのではなく、時間知覚において私たちは時間と直接的な関係にある、というものである。しかし、こうした、直接知覚説的、素朴実在論的な立場を、時間の流れの実在を否定する人たちが受入れることができないのは明らかである。時間の直接知覚説によれば、世界は私たちが知覚しているとおりの時間的あり方をしていることになるからである。

ただし、こうした時間知覚における因果性の問題は特定の形而上学的立場だけに関わる問題ではないということは付け加えておかなければならないだろう。時間の流れや時間の長さが実在したとしても、時間知覚が因果的であると考える限り、それらが流れの知覚や長さの知覚とどのような関係にあるかということはやはり未解決の謎なのである。

結局、3 次元主義と 4 次元主義の対立は以下のような形を取ることになるだろう。

再び a, b, c, d, e の音が順次生じたと仮定しよう。私が一連の音を聞いているとすれば、私には音が一連なりのものとして聞こえ、また、一連の音が遠ざかりつつあるものとして聞こえている。そして、音が一連なりの、遠ざかりつつあるものとして聞こえているということは、私には a, b, c, d, e がこの順番で聞こえており、さらに、今まさに新しい音がこれら一連の音に付け加わろうとしているところである、ということであるはずである。まず始めに a が聞こえ、次に b が、その次には c が、というように、私が次々に音を知覚し、今新たな音を知覚しようとしているがゆえに、a, b, c, の音が連続して聞こえ、遠ざかりつつあるものとして聞こえているのである。また、聞こえてきたのが慣れ親しんだ音楽の場合には、f, g, h, i, と音が連続して近づいてきていると感じることだろう。それは、この私が次の瞬間には f, その次の瞬間には g, というように順番に音を知覚して行くということである。e が聞こえている瞬間にこれらすべてのことが同時に私の意識の内に生じているとすれば、それは、e が聞こえている瞬間において私のうちに a, b, c, d の痕跡が残されており、また、f, g, h, i, が予期されているからである。これらの痕跡や予期は、この私にこれまでに生じたことの痕跡であり、この私にこれから先に生じるであろうことの予期なのである。

しかし、4 次元主義はこうした考えを否定する。4 次元主義によれば a, b, c, d は先行するそれぞれ異なる時間部分に生じた出来事であり、現在の私に残る痕跡は、先行する時間部分から順番に引き継がれてきたものなのである。f, g, h, i についても同じである。これらは、後続のそれぞれ異なる時間部分に生じるものとして予期されているのである。だから、a, b, c, d が私から遠ざかりつつあり、f, g, h, i が私に近づきつつあるという事実はどこにもないのである。出来事が近づいてきているなどという事実はないにもかかわらず、出来事の接近を知覚していると思い込んで行動し、しかも、その行動がしばしば他人の行動や外界のあり方と合致するのは、先行する時間部分から引き継がれてきた痕跡のありかたには法則性があり、そうした法則性に基づく予期には信頼性があるからである。時間の長さの知覚について、4 次元主義者はおおよそ以上のような仕方で答えることになるはずで

ある。

二つの立場の違いをたとえてみれば次のようなことになるだろう。小学校の入学式を写したフィルムが目の前にあるとしよう。3 次元主義によれば小学校の入学式のときに感光したのは目の前にあるこのフィルムそのものである。このフィルムに昔生じた出来事が痕跡として、過去の出来事を現在に伝えているのである。また、目の前に白いカンヴァスがあるとしよう。どのような絵を描こうか思案している画家は、3 次元主義によれば、目の前のカンヴァスそのものの上に描かれる絵について想像しているのである。

4 次元主義者は同じ現象を異なった仕方で解釈する。小学校の入学式のときに感光したのはフィルムの先行する時間部分であり、感光という出来事の痕跡は時間部分の間で引き継がれて目の前にあるフィルムに到達したのである。また、白いカンヴァスを前にした画家は、目の前のカンヴァスの後続の時間部分に後続の画家の時間部分によって描かれるべき像のことを想像しているのである。

こうした対立はより短い長さの時間意識に関しても生じるはずである。時間意識の最小単位は瞬間ではなく時間的幅を持つという説は W. ジェイムズ以来多くの人に受入れられてきている。ある瞬間における人間の意識には時間幅を持った世界の状態が現れているというのである。人間の意識にはその都度瞬間的な世界しか現れていないとすれば、人間は変化を知覚することができなくなると考えられるからである。「見かけの現在(specious present)」と呼ばれる時間意識の最小単位は、知覚や聴覚のような外的世界の知覚だけではなく、痛みやかゆみのような感覚や、怒りや悲しみのような感情、さらには、思考や想像や想起のような心的行為もその内容として含むはずである。私たちは、列車の動きや音楽の流れを知覚するだけではなく、痛みの持続や変化、怒りの増大、思考の流れといったものも同じように感じ取っているからである。そうした心的状態、たとえば、昔聴いた曲を思い出しながら心の中でロずさんでいる場面を想定してみよう。そして、思い出された音列 a, b, c がちょうど見かけの現在に収まる長さだとしよう。私が a, b, c を思い出しながら心の中でロずさんでいるとすれば、a, b, c は私が意図的に自分の内に連続的に響かせたものとして、この瞬間の私に現れている。a, b, c はいずれも私が自分の心の中から呼び起こしたものであり、だからこそ、こうして今この瞬間に私の心で鳴り響いているのである。

ところが、4 次元主義によれば以上のような感覚はやはり錯覚であることになる。a, b は先行する時間部分において鳴り響いていたのであり、また先行する時間部分によって呼び出されたものなのである。現在の意識に現前しているように感じられる a, b ではあっても、実際は直前の時間部分に現前していたのであり、それが何らかの仕方で現在の意識の現前しているように錯覚されているのである。

しかし、この瞬間の意識に現前している意識内容が実は異なった時間部分のものであるということは、はたして考えられることなのだろうか。

4 次元主義者は年単位から見かけの現在まで、同じやり方で時間の流れが錯覚であることを説明しようとするだろう。しかし、時間幅が短くなるにつれて次第にそれは実感からかけ離れたものとなって行くように見える。それでは、物や人の時間部分にも最小単位があってそれが見かけの現在の長さと一致すると考えたらどうだろうか。それはあまりにも行き当たりばったりというものであ

ろう。見かけの現在の長さは動物の種類ごとに異なるだろう。その中で人間の見かけの現在だけが物の時間部分の最小単位と合致するなどありそうもない。それとも、人間の意識のあり方が世界についての形而上学的事実を決定するとでもいうのだろうか。

こうして、時間部分の説を受入れるならば、私たちはこれまで抱いてきた信念の幾つかを放棄しなければならないことになるだろう。

3　時間の流れと 3 次元主義

人や物全体が時間の中を未来へ進んで行くという A 理論的 3 次元主義の世界像は、時間の流れの知覚をそのまま受入れる。世界中のすべての出来事は私に近づきつつあるか、私から遠ざかりつつあるか、どちらかである。未来の出来事は私に近づきつつあり、過去の出来事は私から遠ざかりつつあるのである。ここで、また指摘しておきたいことがある。それは、あらゆる出来事は近づきつつあるか、または遠ざかりつつある、ということは、意識を持つものの存在とは無関係に成立している事実であるということである。

生命のいない A 理論的 3 次元主義の世界に白いボールがあって、そのボールは時間の経過と共に徐々に白から黄色、黄色から茶色と変色する性質を持っているとしよう。その世界では、ボールが黄色くなる瞬間が近づいており、さらに遠くから茶色に変色する瞬間が近づいているのである。また、ボールの軌道に隕石があれば、ボールと隕石が衝突する瞬間も近づいているのである。

興味深いのは B 理論と 3 次元主義の組み合わせの場合である。人や物はどの瞬間においてもその全体が存在しているとともに、過去・現在・未来といった時制的性質が実在しないような世界において、時間の流れの知覚は額面通りに受取ることができるようなものなのだろうか、それともそれは錯覚と見なされることになるのだろうか。

B 論者であり 3 次元主義者でもあるメラーは、時間の流れは実在しないものの、私たちは時間の流れを体験しており、時間が流れているという信念を持つことは私たちが適切に行動するために必要不可欠であると主張している(Mellor, 1998, chap. 6)。

私が 7 時のニュースを見たいと思っているとしよう。そして、実際に 7 時にテレビのスイッチを入れてニュースを見たとしよう。しかし、なぜ私は 7 時にテレビのスイッチを入れたのだろうか。私が 7 時にニュースが始まると信じていたからだろうか。それだけではない、とメラーは言う。私は 7 時にニュースが始まることをずっと、おそらく何十年にもわたって信じ続けているからである。7 時にニュースが始まると信じ続けていて、7 時のニュースを見たいと習慣的に思い続けていたとしても、私はいつもテレビを見続けているわけではない。私は「今 7 時だ」と思った瞬間にテレビのスイッチを入れるのである。メラーによれば、「今 7 時だ」という今に関する信念――メラーは「A 信念」と呼ぶ――を持つことによって私たちは行為へと導かれるのである。

また、A 信念は変化する。たとえば、時計を見ているうちに「まだ 7 時前だ」から「今 7 時だ」へと信念が変わる。私は新しい A 信念を獲得したのである。このように、新たな A 信念を獲得することが時間の流れを体験することなのである。

ところで、私が 7 時にテレビのスイッチを入れたのは、今 7 時だという事実、すなわち、時制に関する A 事実が成立したからではないだろうか。実際に今が 7 時でなければ私はテレビを点けたりはしないのではないだろうか。今が 7 時でなければテレビを点けてもニュースはやっていないからである。いや、そうではない、とメラーは言う。もし、今 7 時だという A 事実が行為の原因だとすれば、7 時のニュースを見たい人は必ず 7 時にテレビを点けることだろう。ところが、私たちは、しばしば、まだ 6 時なのに誤って今 7 時だと思い込み、一時間早くテレビを点けたり、時計が遅れていることに気づかずに 7 時 10 分にテレビを点けたりするのである。A 事実が関係するのは、行為が思い描かれていたような結果をもたらすかどうかという点である。誤った A 信念に導かれた行為、すなわち A 事実に適合しない行為は、期待した結果を生み出さないだろう。7 時でもないのに 7 時だと思い込んでテレビのスイッチを入れた人は、ニュースではなくバラエティー番組を見る羽目に陥るかもしれないのである。

このように、行為の原因となるのは A 信念なのであるが、「今 7 時だ」という A 信念を正しい信念とするのは、「今 7 時だ」という A 事実である必要はないというのが B 論者としてのメラーのさらなる主張である。「今 7 時だ」という信念が生じた時点が 7 時であれば「今 7 時だ」という信念は真なるものとなるだろう。今という特別な時点を想定する必要はないのであり、時制抜きの B 事実で十分なのである。「ここは東京駅だ」という信念が真であるためには、「ここ性」といった奇妙な性質を想定する必要ななく、「ここは東京駅だ」という信念が抱かれた場所が東京駅であれば良いのと同じだというわけである。

メラーの指摘する通り、私たちは A 信念を獲得し、また更新する。そして、獲得され、更新された A 信念に従って行動する。たとえば、「今 7 時だ」と思ってテレビを点け、「もう 9 時だ」と気がついてテレビを消し、仕事部屋に籠もる。しかし、行為の原因となる信念は「今〜だ」という今に関わる信念だけではないように思われる。今についての信念に加えて、私たちは何かが時間的に近づいているという信念に促されて行動する場合もあるように思われる。たとえば、新しい年が近づいているという思いから私たちは年賀状を書き始め、大掃除にとりかかる。また、自分の打席が近づいてきたと信じるバッターは素振りを始める。それでは、新しい年や打席は正確には何に近づいているのだろうか。「それはもちろんこの私だ。織田信長に新年が近づいているわけではない」と年賀状を書いている人は言うだろうし、「川上哲治やベーブ・ルースに打席が近づくはずはない。打席はこの私に近づいているのだ」と自分の順番を待っているバッターは言うだろう。しかし、時宜にかなった行為を遂行するには A 信念が必要であると考えるメラーのような哲学者は、これは正確な表現ではない、と主張するかもしれない。10 年後の私に新年が近づいているわけはもちろんないし、10 年前の私に新年が近づいていると私が考えているわけでもないからである。10 年前の私に 2021 年が近づいていると信じたとしても私はいかなる行動も起こすことはないだろう。これから起こす行動は 10 年前の私に何の影響も与えないからである。未来の出来事が近づいているとすればそれは今の私でなければならない。私は今の私に出来事が近づいていると思っているがゆえに、行動を開始しようとするのである。そして、出来事が今の私に近づくとは、結局のところ出来事が今という時点に近づくということである。私たちは出来事が今に近づいているという A 信念によって行動す

るのである。

それでは、こうした信念はどのような事実によって真とされるのだろうか。また、どのような事実が成立している場合にこうした信念に導かれた行為は思い通りの結果を生むのだろうか。

現実に今の私に打席が近づいている場合に「今の私に打席が近づいている」という信念が真となり、私は前を打つ打者を飛び越したり、早く打席に入るように審判に注意されたりしなくてすむのだ、という類の答えは B 論者には許されていない。「今の私に打席が近づいている」という A 事実の存在を B 論者は認めることができないからである。B 論者の答えは「「今の私に打席が近づいている」という信念が生じた時点の私に打席が近づいている場合に当の信念は真になる」というものであるはずである。信念が生じたのが 1986 年 9 月 10 日午後 2 時だとすれば、「1986 年 9 月 10 日午後 2 時の時点の私に打席が近づいている場合に信念は真となる」と日付入りの B 表現を使って言い換えることもできるだろう。同様に、新しい年が近づいているという信念が生じたのが 2020 年 12 月 27 日だとすれば、「「新しい年が今の私に近づいている」という信念が真となるのは、2020 年 12 月 27 日時点における私に 2021 年 1 月 1 日が近づいている場合である」と言うことができるだろう。こうして、時間の流れの知覚に関わる A 信念についても、それ以外の A 信念と同じように、B 事実によってその真理条件が与えられることになるだろう。そして、人や物がどの時点においてもその全体が余すところなく存在している 3 次的世界においては、その条件が満たされることは可能なのである。

歴史上の人物についても同じことが言える。たとえば、1575 年 4 月時点における織田信長の「戦いが近づいている」という信念は、その時点の信長に戦いが迫っている場合には真である。そして、信長が 3 次元的存在ならば、実際に長篠の戦いが一ヶ月後に迫っていることになるので、それは真なる信念であるということになる。また、同じ信長であっても、1580 年時点における信長は長篠の戦いから遠ざかっているということになる。しかし、信長は本能寺の変に対しては限定なしに端的に近づき、誕生からは端的に遠ざかっている。信長の誕生以前の時点に信長は存在せず、本能寺の変以後にも信長は存在しないからである。トランプも、それが 3 次元的存在ならば、2020 年時点においては 2024 年の大統領選挙に近づき、2016 年の大統領選挙からは遠ざかっている。2021 年 1 月における「2024 年の大統領選挙は近づいている」という 3 次元トランプの判断は正しい判断なのである。

出来事が近づいたり遠ざかったりするのは意識を持つ存在に対してだけではないということにここでも注意しておきたい。風船が膨らみ続け、やがて割れるとしよう。風船にとって破裂の瞬間が近づいているのである。世界に 3 次元的対象が存在する限り、その対象に対して出来事は近づき、あるいは、そこから遠ざかるのである。ただし、例外的な出来事がある。世界はビッグバンによって始まったとしよう。すると、世界の中のすべての物はどの時点においてもビッグバンから遠ざかっていることになる。また、ビッグクランチのようなものがあるとすればすべての物はどの時点においてもビッグクランチに近づいていることになる。すべての物がどの時点においてもビッグバンから遠ざかっているのは、すべての物がビッグバンから生じたからであり、ビッグバン以前に存在しているような物は何もないからである。また、すべての物がどの時点においてもビッグクランチ

に近づいているのは、ビッグクランチが宇宙の終焉であるからであり、ビッグクランチの後に存在する物は何もないからである。信長にとっての誕生と本能寺の変と同じことである。

B 理論と 3 次元主義を組み合わせると世界はおおよそ以上のようなあり方をしているということになるはずである。では、このような世界において時間の流れの知覚は錯覚であるということになるのだろうか。

B 理論的世界には現在という特別な時点はない。したがって、出来事が未来から現在へ、そして現在から過去へと時間位置を変えるということもない。時間の流れを知覚していると言われるときの私たちの時間知覚の内容が、出来事が今という特別の時点に近づき、そこから遠ざかって行く、というものであるとすれば、B 理論的世界における時間の流れの知覚は、現実世界において対応物を持たない錯覚であるということになるだろう。また、B 理論的世界では出来事間の時間間隔も変わらぬままである。本能寺の変と 2024 年のアメリカ大統領選挙のあいだの時間的距離は永遠に同じままである。また、両者ともビッグバンに近づいたりビッグバンから遠ざかったりもしていない。したがって、ある出来事が別の出来事に時間的に近づいたり、ある出来事が別の出来事から時間的に遠ざかったりするということもない。

しかし、3 次元的対象が存在するとすれば、たとえ、過去・現在・未来が実在しなくとも、また、出来事間の時間的距離に変化はなくとも、出来事は近づき、過ぎ去り、遠ざかる。ただし、出来事が近づき、過ぎ去り、遠ざかるのは今に対してではない。出来事が近づき、過ぎ去り、遠ざかるのは特定の時点における 3 次元的対象に対してである。3 次元的対象は、どの時点をとっても、何らかの出来事に近づき、何らかの出来事から遠ざかっていると言い換えても良い。したがって、時間の流れを知覚していると言われるときの時間知覚の内容が、特定の時点の自分に対して特定の出来事が時間的に近づき、また、特定の時点の自分から特定の時点の出来事が時間的に遠ざかるというものであるとすれば、B 理論的 3 次元主義の世界においても時間の流れの知覚は錯覚ではない。世界は知覚されたとおりのあり方をしているからである。

私たちは時間の流れを日常的に知覚している。ところが、日常的な時間知覚と時制的性質の実在を否定する B 理論の間には齟齬があると多くの哲学者は考えている。そして、時間の現象学と B 理論を調停するためには 4 次元主義を受入れる必要があると言われたりする。私たちが 4 次元的存在であることを受入れれば、時間の流れの知覚が錯覚であることをうまく説明できると言うのである。しかし、時間が流れるとは出来事が私に時間的に近づき、また私から時間的に遠ざかることであるとすれば、時間の流れの知覚と B 理論が相容れないというわけでは必ずしもない。私たちはどの時点においてもその全体が余すところなく存在しているとすれば、過去・現在・未来といった時制的性質が実在するか否かにかかわらず、世界は私たちが知覚するとおりの時間的あり方をしていると言って良いのである。

文献表

Deng, N., (2019), “ One Thing After Another : Why the Passage of Time Is Not an Illusion”, in Arstila, V. *et al.* eds. *The Illusion of Time,* Palgrave.

Ismael, J., (2011), “Temporal Experience”, in Callender, C., ed. *The Oxford Handbook of Philosophy of Time,* Oxford University Press.

Le Poidevin, (2007), *The Image of Time,* Oxford University Press.

Mellor, D. H., (1998), *Real Time　II,* Routledge.

Price, H., (2011), “The Flow of Time”, in Callender, C., ed. *The Oxford Handbook of Philosophy of Time,* Oxford University Press.

Sider, T., (2001), *Four Dimensionalism,* Clarendon Press.（『四次元主義の哲学』中山康雄監訳、春秋社）

Velleman, J. D., (2006), “So It Goes”, in Velleman, J. D., (2015), *Beyond Price,* Open Book Publishers.

Williams, D. C., (1951), “The Myth of Passage”, in van Inwagen *et al.,* eds. (2008), *Metaphysics : The Big Questions, second edition,* Blackwell.

星野　徹 (2018)、「意識と時間」『埼玉大学紀要（教養学部）』第 54 巻（第 1 号）

星野　徹 (2019)、「意識と持続」『埼玉大学紀要（教養学部）』第 54 巻（第 2 号）